

〔論説〕

現在の困難を乗り越える日本の強みと弱み

ベン・アミー・シロニー（倫理研究所客員教授）

災害を乗り越える力

日本は現在、近代における一つの最も困難な局面に立たされています。2011年3月11日に東北地方を襲った三重の災害である地震、津波、そして原発事故は、すでにデフレのために脆弱な国内市場や競争力の低下を患っていた日本経済に大きな打撃を与えました。この災害は、これまで高齢化や出生率の低下、若者の勤労意欲の減退に苦しんでいた日本社会に大きな一撃を加えたのでした。内外の観測筋の中に、一先進工業大国としての日本はもうお仕舞いである、と断じる者たちがいても無理はありません。しかし私はこの憂いを至当なものではないと考えています。日本は多くの強みを持っていますが、思うに、それらは日本を現在の窮地から救い出し、再び正常な軌道に乗せ得るものであると思っています。

それでは、その強みとはどのようなものなのでしょうか？日本人は長い年月を通じ、地震、津波、台風、洪水、火災や戦争などの、自然災害や人的災害と共に暮らす事を学んできました。例えば1657年の明暦の大火は、江戸の三分の一を破壊し、約10万人の人命を奪いました。1703年の元禄大地震は、関東地方の大部分を破壊し、10万人以上の人々を死に至らしめました。そのほとんどが、地震後の津波によって亡くなっています。1854年から1855年にかけて東日本で起きた、安政の三大地震は、およそ2万人の命を奪いましたが、これに続いたコレラの大発生では、さらに10万人の人々が命を落としています。1923年の関東大震災では、東京と横浜の大部分が破壊され、14万人以上が亡くなりましたが、そのほとんどが火災で命を失いました。1944年と1945年のアメリカの空襲は、広島と長崎への原子力爆弾投下も含めれば、日本の都市の大部分を破壊し、約五十万人の命を奪ったのです。

これらの災害に対する日本人の反応は建設的でした。彼らは嘆いたり、スケープゴートを求めたり、神的な解釈を見出そうとする事に無駄なエネルギーを費やしたりはしませんでした。彼らは死者を火葬し、瓦礫を片付け、破壊された村や町、都市を再建したのでした。災害は生活の一部であり、進歩を促す因子でもありました。災害は人々が苦難に耐え、絶望する事なく、懸命に働くように、また、古い建物をより新しく、優れたものに建て替えるように促したのであります。東京は1923年の震災後に、以前よりモダンに建て直されましたが、1945年の後にも、再び現在の超現代的東京の礎として再建されました。同様の事は広島や長崎を含む他の被災都市にも起こり、それらの都市は活気に溢れる場所となりました。

災害は、乗り越え、そして忘れられなくてはならなかったのです。今日、元禄時代は、当時の芸術と演劇によって記憶されているのであり、津波によって記憶されているわけではありません。幕末時代は火災やコレラではなく、当時の志士たちによって記憶されています。日本人は災禍を恥じています。過去を嘆くという事をしません。自然災害や人的災害というものは、起こっては去るものであって、これを気に病む事は理にかなわないのです。日本人の第二次世界大戦における悲劇からの復活には、驚くべきものがあります。